

令和7年度 真庭市総合教育会議 議事録			
日 時	令和7年12月23日 13:30~15:00	場所	真庭市役所3階 応接室
出 席 者	市長 : 太田 昇 教育長 : 三ツ宗宏 教育委員 : 常本直史、徳山周一、高谷絵里香		
議 題	協議事項 少子化社会の中、地域全体で子どもを育むための体制のあり方について ①教育長から説明 ②出席者意見交換		
経 過 及 び 結 果	太田市長 : 開会あいさつ <p>今日のテーマは「地域全体で子供を育む」ということあります。真庭市、教育委員さんに頑張っていただいて、コミュニティスクールの導入などの取組を進めていますし、高校の魅力化の取組も市長部局も一緒になって進めている。いろんな面において、地域を意識した取組をしている。総論として地域全体で子どもを育むことに反対はないと思うが、その中でも問題点、さらに充実させていく点、それも教育行政の方でやることもあれば、地域の方で考えていただくこともあるれば、学校でも考えていただくこともあれば、そういうことも含めて自由な活発な意見をいただけたらと思う。特に少子化が進んでいるから、10人程度の学校と300人の学校とか違いますから。真庭市は広いですから、地域によってもかなり差があるので、あまり一律にもできないですが。それでは、三ツ教育長から問題提起というか話題提供をお願いします。</p> <p>三ツ教育長 : 【話題提供】 それでは私の方から少し話をさせていただきます。スクリーンをご覧ください。これは、今年の写真です。旭川勝山、川遊びの写真です。“2040年、真庭市民は人生を楽しんでいます。”ということで、そのために教育行政として今、何を大事にしたいかなということを話したいと思う。当たり前と言えば当たり前ですが、少子化というのがどんどん加速していて地域ごとに大きく違う。我々が大事にしないといけないなと思っていることは、子どもが少なくなるということは、相対的に大人が増えているということ。子どもたちへの期待も大きくなっているのも間違いない。そうした中で、○○教育、○○対策というのもどんどん増えているという状況がある。子どもまんなか政策を国全体で進められて、財政の方も確かに充実してきている。じゃあ現実的に子どもの様子を見たときにちょっと考えないといけないことがあるのではということで、この間報道されている数字を挙げている。これがどうかということがあるので、国際比較で精神的幸福度が日本は非常に低</p>		

い。小中高生の自殺者の高止まり、不登校は過去最高。我々が考えないといけないのは、たしかに支援充実は大事だけど、支援が足りていないから、支援をどんどんすればいいのか、あるいは支援の方向そのものが間違っているのかを考えないといけないと思う。背景として、教育の制度に限らないが、今までずっと、同じであることが尊いとか、みんなと同じという概念が大事にされていた。「同調圧力」が問題になる。と同時に、かつては成功だったのでしょうか、決められたレールで決められた 1 つのものさしで測つて、歩むことが成功への道だと。踏み外したら戻れないという恐怖。そうした中で大人社会全体もだんだんと疲弊してきている。右肩上がりの経済成長、人口増を前提とした社会システム、教育システム自体が子どもの幸せを阻害しているのではないかということも考えないといけない。それからもう一つ、支援という名前で、ひょっとしたら子どもが自分で育つ力を奪っていないかということ。ひとつは子どものためを思って、あれも必要これも必要と、与えすぎていないか。二つ目は失敗したらかわいそうと、転ばぬ先の杖をついて、失敗から学ぶ権利を奪っていないか。提供されることに慣れてしまった子どもたちは、お客様化していく。こうした中で、日本財団がやっている意識調査で、日本の 18 歳の若者は自分で国や社会を変えられると思うか、あるいは責任ある社会の一員かという問い合わせに対して、国際比較が非常に低いという印象。市民の主体として育っていくのだろうかという印象。今、歴史軸の動きで少し話をしましたが、個人の軸でも考える必要があるかなと思っていて、サザエさんの例を出しているのですが、波平さんとフネさん。作品の年齢は、波平さん 54 歳、フネさん諸説ありますが 52 歳。つまり、人の一生がすごく伸びているという軸も考えないといけない。従前のモデルは、学校で勉強して社会に出て、豊かな老後という、どちらかというと学ぶということをぐっと前に押ししたモデル。ただこれからは 100 年の人生を豊かにということで、子どもも学ぶし、大人も学ぶという関係性。今まで、押し付けていたものを「基礎」と「好き」を育むことをしっかり大事にしながら一生学んでいく軸を考えていかないといけないのではないか。これはカリフォルニア大学調査研究したところによると 2007 年生まれの日本人の寿命中位数は 107 歳と出されています。当たるかどうかはわかりませんが。そうした中で今、「こどもまんなか」は、考え方として大事にしたいなと思っていることは、決してサービスを提供することではないということ。子どもが自分で育つことを支えていくことともに、そこで一緒に大人も学んで、子どもと一緒に楽しめることを大事にしたい。大人が楽しんでいることが、子どもにとっても大事。こどもまんなかということを軸において、これから教育という観点ではあるが、まちづくりに寄与することで、大事にしたいと思っていることが 4 つある。一つは、大人が学ぶ、考える、楽しむ場を、子どもを軸にしながら作っていく。と同時に、地域づくりの点でいえば、子どもがやってみたい、を応援すること、それが活動量に繋がれば。自然発

生的に、人をつないでいくことと、安心して居られる拠点が必要。「拠点」ということで、社会教育施設、学校がうまく位置付けられたらと教育委員会では考えている。大人の背中が最高の地域教材と書いていますが、先ほどの子どもの数が減っていくということにもつながるが、大人の思いが出やすいと思う。「将来の担い手が必要だ」、「ふるさとのことを学ばせないといけない」、もちろんそうだとは思うのですが、一つ間違うと子どもは受け手になってしまふ。そうすると関わりしろの場所として、子どもたちがついていかないのではないかと危惧している。もちろん大事なのですが、今郷育をしているけれども、地域で活躍している大人と会って、子どものやってみたっていうのを応援してもらう関係性を一緒に作っていく。そこで関わりしろと身近なロールモデルを作らないと、将来の U ターン、I ターンにつながりにくいかと思うので、今、郷育をしている。教科書では伝わらない。今は人口減少時代、衰退ととらえて出来るだけゆるやかにする必要があるが、対応に追われてしまうことになりがち。いつも市長がおっしゃっているように、人口×活動量を豊かさと定義して。活動しろ、ということではなくて、子どもを真ん中に大人がゆるやかにつながる中で一緒に動いていくということで、人の循環が生まれればいいなど。今、教育委員会で考えているのは、学校を拠点に、子どもと大人が一緒に学ぶ。対話で地域を耕すということ。それから、あらゆる地域で遊びっていうこと、遊びに軸を置きながら、大人もゆるやかなネットワークを作っていくということを大事にする。この間の取組でつくづく思うのが、やっぱり丁寧に人をつなぐこと、現場で耕すこと。人がちゃんと位置づいているというのが活動の起点だと思う。子どもは今を幸せに生きる権利があることと、我々大人は学び方を振り返っていけないだろうと。一緒に学ぶ、楽しむということを軸にしていきたいなど。最後に、ウルグアイのホセ・ムヒカ大統領、今年亡くなられたが、子どものこととか人の生き方に関して語られている。今日のテーマでいえば、子ども時代はもつとも幸福な時代。子どもは遊びで学んで幸せにならなければならない。子どもはその年代にしかできないことを経験しながら育ていかないと、言われている。以上、話題提供させていただきました。

太田市長：

ありがとうございました。では、この話を含めて、自由にそれぞれの立場から、いかがでしょうか。

徳山委員：

教育長の話の感想ですが、一番感じたことは「大人が学び楽しむ」ということ。現役時代は学校でボランティアの方を迎える立場から、ボランティアとして学校に行く立場になった。先日もボランティアで学校に行ったが、ボランティアで行くと、こだわりをもって楽しんでいる人のところに子どもたちは自然と集まっていると感じる。それから、「遊びの

日」というのがあって、子どもから大人まで、遊びを通して関わる。そこで、85歳の女性の方が段ボール遊びをした。私はひやひやしたが、その方は「楽しい。子どもに負けるものか。」と言っていた。その方の周りには子どもも大人も集まつた。そういう、年をとってもいきいきとしている人に集まつて、話が盛り上がつていたと思った。学校づくりを通して、子どもも育つているし、それから地域づくりにもつながつているなと思う。大人が学び、楽しむことが本当に大事なことと思う。学校づくりにも地域づくりにもつながると思った。

高谷委員：

私自身、14年前真庭に移住してきたことを思い返すと、地域に入ったときに、地域の方がそつと見守つてくださつた。介入しすぎずにいてくれた。相対的に大人の割合が増えることが果たして良いことだけなのかと、その話を聞いて本当にそうだなと思った。窮屈に感じてしまつたりとか、大人が変に導いてしまつたり、正しさを押し付けたりしかねないと思つてた。移住した時に、真庭の方はそつと見守つてくださつて、自分の主体性が芽生えた。大人がただそこにいるだけでいいというか、変に干渉しすぎず、助けてほしい時は手を差し伸べるし、導くのではなく、それぞれ子どもたちがやりたいな、これが好きかなとヒントを与える、そういう関わり方が出来たらいいのかなと思った。そういう意味ではいろんな居場所が出来ていて、関わりすぎずそつと見守るということが真庭市として出来ていると感じた。スライドの中で出てきた“自分の国や社会を変えられると思うか”的数字が低かったが、私自身も真庭市に移住してこなかつたら、「いいえ」だったと思うが、今は「はい」と答えられる。そう思えるような教育、関わり方をしていきたいと思う。

常本委員：

教育長の話を聞いて、真庭市はすでに動き出している、いつも子どもたち目線で、子どもを見ながら、学校教育は成り立つてると常に感じている。私は地域に支えられて学校は成り立つてると思う。私が若いころ県立高校に勤めていた時、課題の多い、俗にいう荒れた学校だったが、その時は生徒を囲い込んで良くみせようということがあつた。ただ、生徒を外に出すと、外の大人が変えていってくれる。例えば、駅長さんが「駅でゴミを捨てるのだったら、掃除をしろ」と言つて、その子たちがみんな掃除を始めた。とか、地域の祭りに出る、地域の行事に出ていくと、学校の中でごちやごちやしていた子たちが、地域の大人の中でいきいきとやつている姿を見て、学校だけでは子どもたちは育たない、地域の中で育つていくのがわかつた。だからこそ、長く真庭の学校で務めさせてもらつたが、まず子どもたちにとって、一番何がいいのかなと。大人の生き方にふれられるのがいいのかなと思う。だから今、真庭高校では、「真庭探求ツアーハー」をしている。外から移住者されて來た方の話を聞こうと、触れようと。地元に住んでいる人と触れ合おうというツアーハーしている。子どもたちの感想を見ると、こういう人たちが真庭にい

るのだと、初めて知ったと。大人の生き方に触れさせるのがいいと思っている。先生方に言っているのは、子どもたちにとって良いと思うことはとりあえずやってみよう、とやった。地域防災、地域の方と一緒に防災訓練もやっている。つい先日、真庭ジョブフェア40社が真庭高校に来て、企業の方と話をした。どういう風に企業が成り立っているのか、それから企画する格好いい大人たちを見ると、子どもたちは凄く笑顔で楽しそうだった。真庭市は、動き始めていると感じた。そういう機会をもっと増やしたい。真庭市が一番良いのは、行政のバックアップがいいなと思う。今の歳になるとすごく思うのですが、外からの視点、自分とは違った、寛容でなければならぬ。受け入れる、一緒になって考えること。地域にもっと根付いていけばいいなど、ここでの話や教育長の話とか、もっと今日のようなことが市民にもっと浸透していってほしい。レールはずれても、やり直しがきくような社会になってほしい。私もホセ・ムヒカ元大統領の言葉をメモしているのですが、“結局私たちは幸せになるために生まれ、命より大切なものはない。”とも言われている。“子ども時代は最も幸福な時間であり、大人は子どもをせかさないでほしい。子どもはゆっくり育つ。”そういう関係づくりが真庭はできると思うし、やっていく必要があると思う。

太田市長：

ものすごく大きい話をすれば、明治の時からの近代日本の歩みをもう一回振り返らないといけないと思っている。もちろん江戸時代がいいとか言っているのでは全然ありませんが、やっぱり急ぐんですよね。近代日本になるためというのもあって明治維新からも急いで、結局、客観的なことを大事にしない。科学的に思考する力が弱いのではないかと。効率を求める事だと、豊かさとか、幸せだと、もう一度それはどういうことのかと考えるような教育であり、風潮であり。私なんかは典型で育ったなと思うが、高度成長の中で、農山村にいなくていいと、農業がどんどんダメになっていく、田舎もダメになっていくと言われ。勉強していれば、強制はそうなかったが農作業のお手伝いとか全く言われなかった。自分たちが苦労しているので勉強したらいいと。兄も四年制大学に出す、そういう親でしたから。貧しい中でも建具屋のいい机で、教育投資をしてくれる、そういう中で育ってきたし、現にそういう都市部に出た人の一部ですが収入が何千万とか、もっといくかも。でも、全体として大人が楽しい顔をしていない。大人が疲れて、青少年の自殺が多いというのはずっと変わっていない。これでいいのかと。本当に日本財団の国際比較を見ると、国の状況に愕然とする。エネルギー自給率、食料自給率が低い。円安で、物価が上がるのは当然。人生100年時代になるのに、興味をもって考え続けることをしていない。社会が変わっているのに、近代以前の発想が変わらないから。楽しく学ぶ、自分が成長する楽しみみたいにならないものなのか。それは大きな

話ですが、そういう大きな観点から話をしないと思う。真庭市民、相対的に善意な人が多いと思う。もっと広く見た方がいいと思うことが多い。特にジェンダーの観点とか。私自身も変わらないといけないと思っている。田舎の悪いところばかりではない、自信を持てばよいと思っているが、田舎の弱いところは自分たちで変えていく。子どもたちが、社会が変えられると、18しかない。大人だって一緒。でも、やれば変えられる。ほんのちょっとしたことかもしれませんが、高校入学希望者が12月の時点ですが、勝山高校20人、真庭高校10人、全部で30人増えると。市民の人も、みんなが真庭に帰るのがいいと、やっぱり応えてくれる。そういうふうに思っている。教育委員会予算も、必要な予算を切ったことはない。図書館は、他に比べると相当延びている。これだけやっているのだから、利用者がもっと伸びてほしいとは思っている。落合の高齢者大学は活発だけど、他は全部潰れている。強制ではないですが、楽しいこと、体操教室とかそういうのでもいいのです。教育長、そういう意見もありますが。

三ツ教育長：

現実の世界で耕していく。つないで対話して一緒に考えていく。少しずつ進めていくしかない。先ほど、大人の数が相対的に増える、子どもへの関心が強くなる、と言いましたが、決してマイナスばかりとは思っているのではなくて、むしろありがたいなと思っている。少子化をチャンスにと考えるときに、やはり大人がつながって、活動するチャンスだと思う。と同時に学校ももっと開いていく。例えば、子どもと一緒に大人が学んでもいいと思っている。社会教育として、大人が学ぶ可能性がある。大人が緩やかにつながっていく。真庭市の人たちは高齢者も含めて、人生100年時代を学びながら楽しみながら、子どもへの関心が強くなること。チャンスにもつなげられるということ、いかにそこをつなげていくことが悩みであり、関心もある。子どもにおいては大人と一緒に考えて、自分で決めて自分で行動することをやっていくこと。やりたいということを基軸に置きながら。今、子どもたちのあきらめ感が強いというのは、ひょとしたら人生経験の中で、自分で考えて、自分で判断して、自分で決めて、自分で行動する、ということがいろんな場面で奪われているのかもしれない。危惧する。これは子どもの責任ではないと思う。そこを人が育つのは学校だけないので、地域の中で、せっかく真庭市内、自然もあるので、いろんなものと関わりながら耕していくかな。地域の人もつながって一緒につながるチャンスになればいいと思う。その拠点として、学校、図書館、山や川など真庭市内の自然をイメージしながらやっている。すぐに結果が出るものではないが、そういう思いでやっている。

太田市長：

小学校、中学校でもいいのだが、高校に社会人を入れてもらうように言えないか。と

	<p>いうのが、私たちの中学校卒業のときには9割くらいは高校行っていると思う。久世は高校が近かったから。ただ、上の世代、高校が遠い人は、高校に行かなくても良いと。高校の授業は相当高度ですから、学び直しをするにはものすごくいいと思う。高校を卒業していても、もう一度高校入学できないのかな。高校も社会人にひらいたら、多様だったら。40人定員いないし、もったいない。</p>
	<p>三ツ教育長：</p> <p>県立はわからないが、社会教育法上は学校の授業ができる。実際、郷学講座を樺邑とかやっている。今度、富原でも。子どもと一緒に。教育課程の中に位置づけて単元があるので、来たり来なかつたりはできない。そこは学校とうまく調整しないとできないが、法律上はたぶんできると思う。</p>
	<p>太田市長：</p> <p>開かれた学校ということで。大変だけど、人間が作った制度は人間が変えられると思っている。どうですか。</p>
	<p>徳山委員：</p> <p>全然思いつかなかつたですが、お伺いして、そういうこともやろうと思えばできると思いました。どのくらい協力できるかわかりませんが。樺邑小学校には空き教室がたくさんあって、教室のひとつは、地域の人の作品が展示してあるし、それから子どもの作品も展示してあって、地域の人が自由に入れる空間になっている。あれはうまい仕組みを考えているなど。博物館みたいでいいなと思った。教育長もおっしゃっていたように、学校が人と人をつなげて、地域の中心になれる、そういったやり方があるかなと見た。他のところでも、そういう利用の仕方を工夫すれば面白いことができるかなと思った。</p>
	<p>太田市長：</p> <p>その樺邑小学校のことはどれだけの人が知っているのでしょうか。</p>
	<p>三ツ教育長：</p> <p>学校側は校長会で紹介しているのですべて知っていて、HPには掲載してあるが、どのくらいの人が知っているかは。</p>
	<p>太田市長：</p> <p>あまり来られても迷惑になるかもしれません、真庭市の施設があると、その中で子どもだけで、一つの機能として教育機能があると。もちろん維持負担はかかるけど、地域の中心的な、特に小学校はやはり地域の精神的な拠り所。それぞれの地域で違いがあって、いろんな形でやつたらいいと思う。</p>
	<p>三ツ教育長：</p>

	<p>樺邑のようなギャラリーのような提案は現実問題、使用できる教室がまだ少ない。子どもの数が減ったといえ、もともと教室が少なく、空き教室が少ない。図書解放であるとか、ギャラリーを使って地域の方と音楽会を一緒にとかは、今もしている。あと、本当に社会教育施設的に活用していくなら、人つなぎをするのが全部学校職員というのはやはり限界がある。モデルであっても、図書館も同じだと思っているが、そういう方が担うということを今後考えていかないと、教員依存しすぎると、転勤したら、はい終わりとなってしまうのは残念なので。</p>
	<p>太田市長：</p> <p>開かれた学校と言われて、教員負担、学校負担が増すようなことをしたら絶対ダメだと思っている。今はそんなことないと思うけど、地域ボスというか、そういう配慮しないといけないとか。負担軽減とかね。</p>
	<p>三ツ教育長：</p> <p>持続可能な仕組みをどうしていくか、また相談させていただきたい。</p>
	<p>太田市長：</p> <p>地域の人で、集落支援員みたいな制度があるから。そういう人がつなぎとか、地域の代表はまたいると思うが、そういう仕組み、今ある制度をうまくつなげば。他に、教育委員さんから、学校を見て回って、現場のこととかそういうことを踏まえてご意見いただければ。</p>
	<p>常本委員：</p> <p>私が真庭高校にいたとき「ひとつなぎフォーラム」というのがあった。高校の取組を発表して、地域の人と一緒に話をする。高校で、中学生も、教員も、先輩方も、地域の方も。そうやってやり取りすることで、地域と学校がお互いを理解し、つながって広がっていく。防災訓練とか。コーディネーターの方もいるし。地域行事的になっていけば、また子どもたちも変化していく。真庭高校へ就職アドバイザーを週1くらいで関わっているが、生徒と話していて、今までの人生を振り返る時だといっている。振り返って、企業を決めていく、そういう話をしている。志望の動機を自分の言葉でしゃべれるようにしようと。何が言いたいか柱を持っていて、毎回違う言い回しでも、言いたいことを伝えられること。生徒にこの練習をさせていると、一生懸命自分で考えてアクションをおこす、言葉を選びながら話すことができるようになる。生徒の中には、大変迷惑かけたから、自分はここで絶対就職するのだと涙が出るようなことをいってくれている子もいる。それから、やっぱり地域が子どもを育てた。14年以上やってきた取組の中で育ってきたと思う。自分で選んで行動している。胸を張って就職、行動しそうなと思う。大学進学した子にも、帰っておいで、といつも言っている。外の世界を見た後、真庭を見る。やっぱり真</p>

	庭がいいなとなってくれたらいいなと。外で活躍もしてほしいけど、それでも真庭に帰ってくる。そうすれば、まちが進化していく、次の世代に伝えていけると思っている。本当に子どもは成長するのだと実感している。
	太田市長： 今日の山陽新聞の記事に、真庭高校のことが掲載されている。久世高校のパンを復活させるということで、色々やってもらえたらしいと思っている。高谷さん、どうですか。
	高谷委員： 話をお伺いしていて、やはり目的は一人一人が幸せに生きていくことだと思う。今、問題になっていることを解決する考え方よりは、みんなが成長する考え方というのも、勝手に問題を解決すると思った。地域の大人がどう関わっていくか、どう関わればよいかわからない、という人も多いと思う。焦りながら生きていく中で、余白をどうつくるか。来られるときに来たらいいし、何もしなくてもいいし、ゆるやかさがあったら、関わりやすくなると思う。
	太田市長： 生徒と大人が率直な対話をする場、そんな場がもっとあれば。畏まったものでなくとも、ずっと真庭に住んで真庭に愛着持っている人の話でもいいし、素晴らしい技術を持っている人とか、高谷さんのように都市部で生活して真庭を選んだ人の話、問題点もあるかもしれないし、良いところも客観的に見えている話をしてもらえると、高校生にいい影響を与えるかなと思う。そんな場がないのですかね。
	高谷委員： 真庭高校ですが、毎年いろいろなところにいくツアーをやっている。
	常本委員： ツアーの中で、話を聞いただけで、子どもの目が変わる。生き方に触れるということを入り口としてやっている。意外と子どもたちは大人の話を聞いたことがない。そういう話を聞く機会を作つてあげて、子どもたちと対話をする機会をいっぱい作る。例えばジョブフェアでも直接、企業と話が出来て、かっこいい大人と話が出来るとか。そういうことが大事だと思う。
	太田市長： 違う人生の歩みを聞ける。真庭をわざわざ選択して来たという話は、子どもの考える視野をひろげ、印象も変える。中学生も、進学希望率も40%くらい？
	教育委員会： 47%くらい
	太田市長：

	<p>私は、最後は子どもの判断でいいと思いますが、そういう出て学ぶのがいいか、そこまでの意味があるのか。例えば3時間かけて通学する意味があるのかとか。移住してきた方々の話とかそんな取組は中学生には、どうなのですかね。</p>
	<p>三ツ教育長：</p> <p>全部の中学校でやっているかは、そうでもないみたいですが、勝山中学校は勝山高校生と地域の人も入って。事業者ばかりではないですが、だんだんと広がっていると思う。学校の教育課程に位置づけたもので、学校によってまちまちですが探求的な学習の時間があるので、地域学習に限らないけどやっている。</p>
	<p>太田市長：</p> <p>東京に出ていたけど帰ってきたとか、移住してきた方と意見交換の場とか。強制ではないけど。</p>
	<p>三ツ教育長：</p> <p>私が今把握してはいませんが、移住してこられた方に限って、というのは聞いたことはないが、地域の方とはやっている。</p>
	<p>太田市長：</p> <p>ほかに、せっかくですから傍聴に来られている方はいかがでしょうか。</p>
	<p>傍聴：</p> <p>さっき言われたように、地域にとって特に小学校は核である。やはり昔の小学校区での地域活動は非常に多い。コミュニティスクールとか地域の方も携わっていますが、そういうふうに生徒の数が減ったとしても、社会人になっても大きな存在ですので、関わっていくことが良いと思う。子どもが地域の人といろんな話をしたら。樺邑の例でいうと、「樺邑学」という樺邑の歴史を勉強している地域の人がいる。その方が学校で、この地域にはこんなものがあった、こういう産業や行事があったとか、生徒に教えている。「郷育」になりましょうけど、子どもにとっても宝物。昔はこんなに人がたくさんいた、と学べる良い場になっていると思う。子どもがだんだん少なくなりますので、地域の人と関わることが大事だと思う。もう一件、先ほど、教育長もおっしゃっていましたが、大人が増えるけど大人の側から接近していくと子どもは引くと思うので、そのあたりの微妙なバランスでよく考えてあげて、子どもから興味をもって地域に人と話が出来るそんな場を作つてあげればと思う。</p>
	<p>傍聴：</p> <p>私は湯原に住んでいるのですが、たぶん今年の出生が5人くらいで、このままじゃいけないと思っている。地域の方と一緒に“湯原学園構想”を進めている。こども園、小学校、中学校、同じ敷地ではないけれど、同じ敷地として。教育の在り方ですが、義務教育だったり、いろんな教育の中で、本当に真庭全体で、同じ教育をする必要ない</p>

と思っていて。今いる子どもたちの教育と、魅力を作つて、外から来てもらえるような教育が大事かなと思っている。今、真庭にいる子どもたちを大切にしながら、市外であつたり県外であつたり、外から魅力をもつて来てもらはれる教育もと思っているのですが、そのあたり皆さんはどう思われるか。

徳山委員 :

湯原小学校に7年勤務した。湯原は昔からよそから来られる方が多い。多いけど、温泉の関係や旅館の関係でまた出て行ってしまう人も多い。私が思うのが、郷育をやっていって湯原の良さをたくさん、新しく来た方に知つてもらうような取り組みをすることが大切だと思う。

常本委員 :

どんどん来てもらいたいと思う。来られる方は目的を持ってこられている。高校生は、津山や鏡野からくる。農業の勉強がしたい、看護に行きたい。外から来た子をきちんと育ててお返しする。または、地元に就職してくれるかもしれないし。蒜山も、真庭高校の看護も全国募集していて開けていると思う。この繰り返しで、根付いてみようかなと、これから先、増えてくるのではないかと思う。高校留学に関しては、親の意見が非常に大きくなるので、途中で自分の気持ちとずれることはあります。昔、津山から学力が高い子が、農業の勉強をしたいと来られて、岡山大学に合格した。岡山大学の学科改变もあるが、1人受けて1人合格した。そういう子も来ていますので、今、再編でごたごたしている時に入学してくれた子だけど、結果が出せたということで、来た子供を一人一人丁寧に育てて、増えてくるのかなと思う。

高谷委員 :

中和では山村留学で、外部から3名受け入れている。地元の小学校に通っている子にもいい刺激になっていると聞いている。可能性があると思うし、自然環境のある真庭は、外部の方にとってはすごく魅力的に映っていると思うので、打ち出していって、外部から人を呼ぶというのは可能性があると思う。

三ツ教育長 :

いろいろな考え方があると思うのですが、地元の子が安心して通えて、学べることがベースだと思う。その学びや環境が共感を呼んで、他の人たちがやってくる。人数が少ないからとあえず人を集めて何とかしようではなくて、お互いが学び合つて共に育つことで、WINWINの関係が出来るよ、ということで取組を進めるべき思う。自治体によっては、とがつたことをして、外部の方がたくさんやってきて、その代わり地元の子は別のところに就学しているという学校もある。それは議論の中で考えていいかと思いますが、まずは今いる子どもたちの幸せを一番に考えること。その中で地域の方々も、子どもたちと関わると喜びが得られることをベースに置きながら。教育を受ける権利を持っているのは子どもであり、教育を受けさせる義務があるのは親であり、行政の責任だと思う。そこを軸に、義務としては大事かと思う。

太田市長 :

	<p>真庭の取組、外からは過剰評価、中は過小評価だと思う。真庭の人も客観的にこんなことをやっている。こんな考え方でこんなことをやっている、それが真庭の魅力に、将来につながるということが、もう少し理解してほしいなと思っている。それが、真庭で生きる自信につながる。この間の様々な取組、外から評価しすぎなのかもしれません。昨日も岡山大学に行って、森林シンポジウムをしたのですが、真庭市の取組をみなさん知っている。もっと社会、外の世界の流れを理解してほしい。そういう生徒が育つって、仕方がなく真庭にいるのではなくて、本当に真庭でやりたいのだと、自信を持ってほしいし、大変だけど。理解してほしいし、そういう意味では基礎学力を本当につけないと。やはりものを理解するには、ものを考える力も大事ですが、その前の一定の体系的な知識が必要ですから。</p>
	<p>常本委員 : 地域交流とか地域での探求学習はいいことだと思うのですが、やはりそういう活動をすることによって、各教科に戻ってきてほしいと願っている。だから、高校生がやっぱり英語の勉強いるなとか、活動が教科に戻ってきて子どもたちが知るということ。そしてやっぱり各教科でしっかり学力をつける、基礎学力が大事と思う。</p>
	<p>太田市長 : ありがとうございました。では、このあたりで終わりにしたいと思います。</p>
	<p>三ツ教育長 : 今日はお疲れ様でした。確かにいろんな課題があるし、答えがないことが多いのですが、今日の中では、あるものを生かして、可能性についても議論できたと思う。高谷さんがおっしゃったように、みんなが幸せに生きるというのは本当に不変の価値だと思う。これからも精査していきたいと思う。ありがとうございました。</p>